留学記念エッセイ

澤口圭宏

はじめに **2**
Match までの軌跡（簡易版） **3**
■ 略歴 3
■ 面接のオファーをいただいたプログラム一覧 4
医師と共に追いかけたもうひとつのこと（エッセイ） **5**
■ 半分報われた日 5
■ もうひとつの情熱 5
■ 趣味のその先へ 8
■ 半分報われなかった日 9
■ ふたつの情熱 11
■ 過去の作品（一部） 13

はじめに

この度、The Icahn School of Medicine at Mount Sinai Morningside/West にて内科レジデントの内定をいただきました、澤口圭宏と申します。西元先生をはじめとした N プログラムの方々、東京海上日動の皆様、初期研修の２年間を通じて私の夢を理解し支えてくださった指導医の先生方、同期、そして家族に深い感謝を申し上げます。皆様の支えなくしては実現し得なかった夢への第一歩であり、ご支援くださった方々に胸を張れるような人生を歩めるよう精進する所存でございます。

Match までの軌跡（簡易版）

可能な限り医学留学に関係のないことをテーマに、とのことですのでエッセイの本文は別のことについて述べたいと思います。とは言いつつも、こちらをご覧になっている方の中には今回の Match に至るまでの経過が気になっている方もいらっしゃるかと思います。そこで、簡易的ではございますが、以下に略歴と面接のオファーをいただくことができたプログラムの一覧を記載いたします。Match 戦略は生物ですので、これから渡米の準備を開始される方につきましてはこちらをあくまで一つの参考資料（Match2024 ではこれぐらいの準備でこれぐらいの面接オファーが来た、IMG に優しいプログラムの一部のリスト）としつつ、最新情報を英語で調べながら準備をしていただければと思います。

■ 略歴

年・月	内容
2016 年 3 月	聖光学院高等学校 卒業
2016 年 4 月	東京医科歯科大学医学部医学科 入学
2019 年 5-10 月	チリ大学 感染症学教室 研究留学
2020 年 3 月	USMLE STEP 1 勉強開始
2021 年 1 月	USMLE STEP 1 Pass (256)
2021 年 5 月	TOEFL iBT (112)
2021 年 7 月	横須賀米海軍病院 Externship
2021 年 9 月	USMLE STEP 2CK Pass (264)
2022 年 3 月	N プログラム予備面接①
2022 年 3 月	東京医科歯科大学医学部医学科 卒業
2022 年 4 月	初期研修（１年目 @横須賀共済病院）
2022 年 7 月	OET Pass
2023 年 4 月	初期研修（２年目 @東京医科歯科大学病院）
2023 年 5-6 月	University Medical Center Southern Nevada Observership
2023 年 7 月	N プログラム予備面接②
2023 年 7 月	USMLE STEP 3 pass (244)

2023 年 9 月	N プログラム第１次選考会
2023 年 11 月	N プログラム第２次選考会
2024 年 3 月	MSMW* Internal Medicine Residency Program に Match

*MSMW: Mount SInai Morningside/West

■ 面接のオファーをいただいたプログラム一覧

- Mount Sinai Morningside and West (N プログラム)
- Albany Medical Center
- Albert Einstein College of Medicine/Montefiore New Rochelle
- Albert Einstein College of Medicine/Jacobi Medical Center
- Ascension Saint Francis
- Ascension St John Hospital
- Berkshire Medical Center
- Cleveland Clinic Fairview Hospital
- Conemaugh Memorial Medical Center
- Kent Hospital/Brown University Program
- Lincoln Medical and Mental Health Center
- Memorial Healthcare System (Hollywood, Florida)
- North Alabama Medical Center
- St Elizabeth's Medical Center Program
- Texas Tech University HSC El Paso
- Western Michigan University Homer Stryker MD School of Medicine

※２つ目以降はアルファベット順

医師と共に追いかけたもうひとつのこと（エッセイ）

■ 半分報われた日

澤口圭宏　様

お世話になっております。TOHO シネマズ学生映画祭実行委員の〇〇です。
本日は、ご応募いただきました『選択』が PV 部門にて上映決定となりましたのでご連絡差し上げました。
…（略）

2022 年 3 月 3 日。医師国家試験も終了し、コロナ禍で失った思い出を取り戻すかのように同期が卒業旅行という活動に勤しんでいる中、例に漏れず私も医学部を卒業することになった友人たちと屋久島に旅行に来ていました。パンデミックも落ち着きつつあるかという雰囲気もありましたが、どことなく世間体を気にして国内旅行を選択した結果いきついたのが屋久島でした。日本の自然植生が凝縮された島と言われる環境を存分に満喫し、旅行も残りわずかとなったタイミングで受信したメールを開くと、なんと国家試験勉強の合間を縫って TOHO シネマズの主催する学生映画祭に応募した作品がノミネートされたことを知ったのでした。

■ もうひとつの情熱

みなさんが情熱を抱くことに何がありますでしょうか。私には医業という、集中治療医として同領域に貢献したいという情熱があります。しかし、飽きっぽく、浮気症な私でありますから、情熱を抱くことがもうひとつあります。その対象とは映像制作です。特に、ダンス等のパフォーマンスを映像に収めたものや、何かを宣伝するためのプロモーションビデオの制作に強い関心があります。まずは私がどのようにして、この、もうひとつの情熱に至ったかについて話したいと思います。

改めて映像制作への情熱の源流をたどってみると、行き着いた先は高校の生徒会での活動でした。生徒会長であった私の業務の中に、毎学期数回開催される全校集会の運営がありまし

た。全校生徒である 1200 人超が集う、大多数がたいして内容を聞かずに早く終了することを望んでいる集会です。この場における私の役割は、彼らに対して効果的に連絡事項やイベントの告知をすることでした。自分に対して興味を持たない集団に自分の話を聞いてもらうにはどうすればいいか考えた私は、集会のときに次の二点を気にするようにしました。一つ目は、”なに”よりも”なぜ”を意識した構成をすることでした。伝えたいことを一方的に伝えるだけでは誰も聞き入れてくれず、その理由にこそ人間は動かされると思い至ったことでした。具体例として、高校公認のキャラクターならびにその着ぐるみの作成を生徒公募で行った企画の提案がありました。当時、聖光学院はある程度の進学校ではありましたが知名度はあまりなく、Google で検索してもヒットするページの大半は甲子園常連校である福島の聖光学院という状況でした。そうした知名度の状況を打破する手段のひとつとしての聖光学院のアイコンを作成したい、という”なぜ”を提示した上で企画の説明をしました。二つ目は、スライドを用いた上で動的な画面展開をさせることでした。大学の多くの講義スライドがそうであるように、スライドは得てして情報の羅列になりがちです。あまり集中していない集団にその情報量は過多であると思い、スライド一枚の情報は多くても３つに抑え、スライドとスライドの繋がりを直感的に理解しやすいようなアニメーションを配置するようにしました。こうした積み重ねがあってか集会での反応は徐々によくなり、最終的には全国高校生徒会大会でのプレゼン大会にて最優秀賞をいただくこともできるまでに至りました。そうして自分の伝えたいことを他人に伝えるという Storytelling の楽しさに魅了されていきました。

そんな Storytelling 魅せられた私が次に興味を持った媒体が音楽と映像でした。大学に入学し、コピペされたような大学生と同じようにスノーボードに夢中になりました。その過程で、スノーボードをするかっこいいであろう自分を撮影して共有したいという、承認欲求に塗れた邪な気持ちが芽生えました。そうして手に取ったのが GoPro でした。GoPro とはアクションカメラと呼ばれる耐久性の高い小型カメラの一種であり、よくテレビで芸能人のリアクションを映像に収めるために体に括り付けられているものです。すごい武器を手に入れたと心を踊らせながら撮影し、データを確認してみると、そこにあったのは意味を持たない風景の連続にすぎない、見るに堪えない情報の塊でした。よくある人生の失敗として胸に秘めておくのも一手かと思われましたが、せっかくお金をかけて得た映像ですから、なんとか他人と共有できる形にまでもっていきたいという欲がふつふつと湧いてきました。どうしようと考え、まずはせめて見るに値する箇所だけ切り取り、繋ぎ合わせてみることにしました。３秒しか見られなかった動画が 10 秒見られるものになりました。切り取りすぎて映像のストックがなくなったので、手ブレで使えないと思った映像を後から補正して使えるようにし

てみました。10 秒から 30 秒に伸びました。ただ映像の連続だと物寂しいので、背景に音楽を足してみました。編集の切れ目を音楽の切れ目と合わせるようにしてみました。映像の順番にどことなくストーリーが見えるように配置し直してみました。60 秒ほどの見られる映像ができました。こうしてガラクタと思われたものをかき集めて作品ができる様は、古い衣服や布地を再利用して作られたパッチワークの作品を連想させ、どことない達成感を得ることができました。こうしてスノーボードという経験を他人へと伝える Storytelling の手段として、音楽に合わせて編集された映像を学びました。

しかしながらスノーボードは雪がないとできませんから、春を迎えると私の GoPro の出番は自然となくなってしまいます。そんな悲しいことは到底許されず、大学生のなけなしの数万円を投資した機材を有効活用すべく、友人との旅行や所属するダンス部の合宿に至るまであらゆる場所に GoPro を連れ回して撮影するようになりました。その度に持ち帰って編集し、出来上がったものを仲間と共有し、喜ばれることは心地の良いものでした。そしてまた次も撮影しようという好循環が生まれていました。そうして気がつくと、私が参加するイベントでは映像化してまとめるのが定番になるまでに至っていました。

■ 趣味のその先へ

「夏公演を宣伝する動画をつくってくれないか。お金は出す。」
所属するダンス団体の幹部からのこの提案が私の映像制作への向き合い方を大きく変えるきっかけとなりました。ダンス団体の名は United Dancers of Medicine (UDM) という、関東圏の医療系大学生のインカレ団体でした。少人数になりがちな医療系単科大学のサークルの欠点を補強する手段として発足した団体はみるみる規模を大きくしていき、当時すでに 1000 人を超える加盟員が存在していました。そんな団体の 400 人が一堂に会する一大イベントが夏公演であり、ストーリーに合わせて十数種類のダンスパフォーマンスが展開されるというものでした。記念すべき第 10 回目の夏公演を迎えるにあたり新しい試みをしたいという、イベント運営者の意向からの提案が宣伝動画の作成でした。いままで自主的に行っていた活動を他人から依頼され、なおかつその活動に対して報酬が発生するという提案は、知らない世界に足を踏み出すような高揚感を覚えさせるものでした。

意気揚々と制作に着手し真っ先に気づいたことは、これから行わなければならないことは、これまで自分が行っていた映像制作とは全く異なるものということでした。これまでは映像

を撮ったのちに、後方視的に映像を繋ぎ合わせていましたが、今度は夏公演の宣伝（具体的には参加者を対象とした振付師の紹介）という目的に対して前方視的に撮影をする必要があるのです。つまり、撮影と構成作成の順番を逆にする必要があったのです。また、映像に出演する十数名のスケジュールや撮影地も考慮する必要があり、これまで行っていた活動は本格的な映像制作をする上でのほんの一部のみであったことを実感しました。

そうした困難を乗り越えてなんとか映像を納品し、その対価として少しばかりの金銭をいただきました。この自分が情熱をもつ活動に対して報酬が発生したという経験は非常に強烈であり、映像制作に対する向き合い方を変化させるには十分すぎるものでした。仕事の報酬は仕事とは良く言ったもので、初めての依頼を皮切りに多くの方に依頼をいただけるようになり、ダンスの卒業制作動画や結婚式のオープニングムービー、新規 Media 立ち上げ時のプロモーションビデオ等多くの映像制作に携わることができました。

しかし、そんな映像漬けの生活もずっとは続きませんでした。学部４年末時に渡米を決意し USMLE の勉強を開始したことや、COVID-19 パンデミックに伴い撮影依頼がめっきり減ってしまったこともあいまって、少しずつ映像制作の頻度は落ちていきました。

■ 半分報われなかった日

時は経ち、学部６年時の 9 月に USMLE も STEP 2CK まで終了し、残す学生中のイベントは医師国家試験のみとなっていました。点数を気にしなければいけない USMLE の試験を全て終えた開放感の中、漫然と日々を過ごし、気づくと年を越していました。医師国家試験まで残り１ヶ月を切った 1 月 7 日に、勉強の現実逃避のために SNS の投稿を眺めながら無意味な時間を過ごしていると、スマートフォンの画面に表示されたとある広告の文字列が目に飛び込んできました。
「TOHO シネマズ学生映画祭　作品募集中」
夢うつつに入眠をもってその日を終わらせようとしていた私の上体を起こすのに、その文字は十二分でした。かの TOHO シネマズが主催する学生映画祭があると。そして作品が募集中と。胸をときめかせ、間髪あけずに広告をクリックし、募集の詳細を確認し、次に目に飛び込んできたのは以下の文字列でした。
「応募締切：2022 年 2 月 7 日（月）23:59」

ちょうど１ヶ月後、医師国家試験の翌日の日付がそこにありました。一瞬躊躇しましたが、そうしている時間すら勿体無いほど期限が迫っているのが現実でした。ショートムービー部門、アニメーション部門等、各部門がある中、唯一制作が間に合いそうな制限時間１分のPV 部門で応募することを決意しました。テーマは”ポップコーンとコカ・コーラがあることにより映画館で観る映画が、より特別で楽しいものになる”ことを伝えるショートムービーを制作すること。そこから寝る間も惜しんで脚本を制作し、必要となる出演者や撮影地のリストアップに着手しました。撮影には演者１人とエキストラ２人が必要で、撮影地は生活感のある住宅と路地、そして映画館を確保する必要があると試算を出した頃には窓の外は白んでいました。少しだけ仮眠をとったのちに人間が活動を始めそうな時間を狙い、協力してくれそうな友人に連絡をしました。幸運にも二つ返事で承諾をしてくれ、そこからはトントン拍子に準備が進んでいきました。必要となる小道具等を調達し、小さな映画館を上映時間外に撮影場所として貸してもらうように相談し、撮影日程を調整し、撮影を終えると 1 月 25 日になっていました。そこから編集をし、協力してくれた友人と相談しながら微調整を重ね、2 月 2 日 21 時 12 分に作品を提出しました。

さすがに医師国家試験も差し迫っていましたからそこからは勉強に集中しました。そして 2 月 5・6 日の試験本番を終え、翌日 7 日に映像応募締め切りが過ぎたとふと頭をよぎったのも束の間で、あらゆるものから解放された喜びから各方面の友人らと卒業旅行を楽しんでいました。できるだけ都心から離れようと、北は北海道、南は沖縄と移動し、流れ着いた先である屋久島で迎えた 3 月 3 日のことでした。応募した作品が選考を通過し、映画祭にて上映が決定した旨のメールが届いたのでした。映画祭の本番は 3 月 24 日に TOHO シネマズ日比谷にて開催予定とのことでした。すぐさま協力してくれた友人らに選考突破と上映決定の報告をし、当日の予定をあけてもらうようお願いをしました。各方面への連絡を終え、少し遅れてから自分の作品が巨大スクリーンにて上映されるという実感が湧き、自然と足取りが控えめなスキップに変化したのを今でも覚えています。

そして映画祭当日。景気付けに昼に鯛茶漬けを頬張ってから会場へと向かいました。上映会場である日比谷にある東京宝塚ビル地下のスクリーン 12 は、イベント利用できるステージも存在しており、最大規模ではありませんが、15.0×6.2m と視界いっぱいに広がるスクリーンがありました。友人と共に関係者席席に小躍りしながら着席し、すぐに審査員の紹介から始まり、各部門のノミネート作品の上映が始まりました。分かってはいましたが、ノミネート作品の監督は自分以外は他大学の映像学科の 2〜4 年生が主体でした。そういった集団に入り込めた喜びと共に、その空間において自分が圧倒的な素人であることを実感させられま

した。上映作品一つ一つが衝撃的であり、心の奥底にある感情を揺さぶられるような映像美や練り込まれた脚本、一つの作品に携わったであろう多くの人間の多さに驚かされました。そうして 5 時間超に及ぶ上映時間はあっという間に過ぎ去り、各部門の最優秀賞の発表の時間となり、私の作品は呼ばれないまま映画祭は終了しました。

■ ふたつの情熱

このようにして少しだけうまく行った映像制作という情熱ですが、もうひとつの医業という情熱との繋がりを実感したのは不思議なことに、米国内科レジデンシーの面接での場面でした。

５人に１人程度の頻度で聞かれた質問に、
”If you had to pick a career other than medicine, which one would that be and why?”
、というものがありました。”もし医療分野での将来を選択肢しなかったら”、という質問ですが、真っ先に浮かんだのはいわずもがな映像制作のことでした。そして”why”の部分に対しての回答は、作品を見せた時の周囲の人間の嬉しそうな反応に喜びを覚えるから、といった内容となりました。これは医師として治療後に患者家族に感謝されることの喜びを連想させ、根源的な喜びは共通しているのだなと思い知らされました。

そしてさらに思考を深めると、実は意外な形で映像制作の過程で得た知識が医業に役に立っていることを実感しました。最もわかりやすいものから触れると、Storytelling があります。誰かに物事を伝えなければいけない場面は多々あります。最も頻繁に訪れるものだと日々の他科の医師へのコンサルトや他職種への指示、頻度は落ちますがその他の例だとカンファレンスや学会でのプレゼンテーションがあります。”なに”よりも”なぜ”を重視する精神や、退屈させないスライド展開を意識したプレゼンテーションによって効果的に意思疎通が図れました。また、もうすこし大きな視点だと、映像制作という一つの企画を達成する上でのチーム内連携や計画立案があります。最終的に達成したい患者のアウトカム改善という目標を踏まえた上で利用できるリソースを確認、そしてその過程で必要となるチーム内での各役職への連絡といった内容はまさに映像制作の時に問題に直面したことの裏返しでした。このように後から見てみると、関係ないと思われた努力は決して無駄ではなく繋がっているんだなと思い知らされました。

”Connecting the dots”という、何万回と引用されたであろう Steve Jobs の言葉があります。Jobs の人生において、紆余曲折の過程で経験したこと（dots）が繋がることで Apple の成功へと繋がったという気づきから生まれた言葉ですが、彼は同時に “You can’t connect the dots looking forward” - 前方視的に点を繋げることはできない、とも述べています。今回の振り返りを通じて首がちぎれんばかりの賛同ですが、後半部分に対してはやや賛同しかねる部分があります。つまり、前方視的に点を繋げることはできないかもしれないが、点を繋げられるように努力はする必要があると考えています。そして、その努力とはその点に対して全力で取り込むことだと思います。

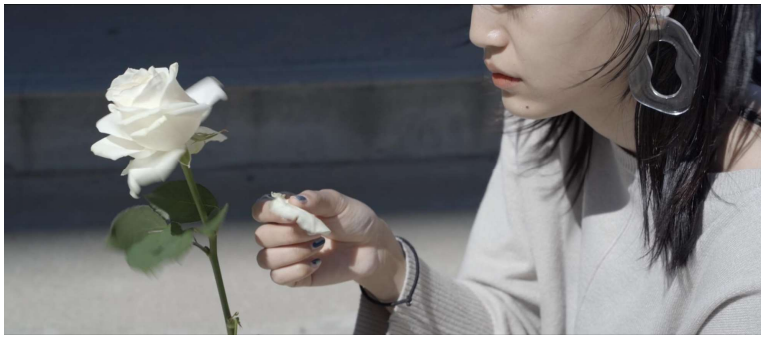
一見繋がったように見えた医師と映像制作という点ですが、もし全力で取り組んだ末に他人から仕事として制作をしたという経験がなければ、他の人との連携することはありませんでした。また、医業についてもまだ二年という未熟者ではありますが、能動的に動くことで医療行為を行う上での各役職の利害関係を管理することの重要性を学ぶことができました。このようにしっかりと取り組むことで発見することのできた線があったように思います。

これからも自分の興味が向いた対象には全力で取り組む姿勢を忘れずに生き、医師として、そして映像制作者として、自分の納得のいく物語を紡ぎ伝えられるよう邁進していければと思います。以上の拙文をもって、これからの始まる米国での歩み方の決意といたします。

■過去の作品（一部）

「第 14 回 UDM 夏公演 CM」 - 2024 年夏開催予定の UDM によるダンス公演の宣伝動画

「俺が俺が俺が」 - ダンス卒業制作動画



「self」 - ダンス卒業制作動画

「選択」- TOHO シネマズ学生映画祭 PV 部門ノミネート作品